

「クペ」概念の再考——A. サン＝レオン著『ステノコレグラフィ』におけるポゼとクペの呼び替えに着眼して

吉田久瑠実（成城大学大学院）

19世紀のバレエの練習課題を記録したA. サン＝レオン著『ステノコレグラフィ』(1852)では、ポゼ（「置く」）という脚の指示が多用されている。F. パッパチェーナ（2004）が指摘するように、これらのポゼのうち練習例 26 の 1 箇所のみでクペ（「切る」ことに由来する基本動作）と呼び替えられていることが確認できる。本発表ではポゼがクペと呼ばれる場合を検討することで、クペの定義や機能についての理解を改めることを目的とする。さらに、クペの動作と「切る」という言葉の意味が歴史を通じていかに関わってきたのかについても考察する。

『ステノコレグラフィ』における全練習課題の解説文を精査すると、ポゼと記載されている箇所が 32 箇所あり、大きく 3 種類に分類できることが判明する。1つ目が、ポゼ・アティチュードのように特定のポジション・姿態を指示するものである。2つ目は、いずれかの方向に持ち上げられた片脚を他方の脚の上または下に重ねるものである。そして3つ目が、いずれかの方向に持ち上げられた片脚を他方の脚の上または下に重ねてから、逆脚をいずれかの方向に上げるものであり、練習例 26 のクペと言い換えられるポゼは、この3つ目の種類に該当する。

3つ目の種類のポゼは多数確認できるが、クペと言い換えられるのは練習例 26 の 1 箇所に限られる。ここでクペと言い直される条件を考えると、ポゼがフレーズの最後に位置していることが関係している。つまり、当該のポゼは歩数や脚の左右を調整しつつ、フレーズを切っているのである。練習例 26 のクペは、譲原晶子（2007）が指摘する 17 世紀におけるクペが担っていたフレーズを完結させる機能の名残として捉えることが可能になる。このように練習例 26 の一部のポゼがクペと言い直されているのは、19 世紀にもなおクペが語源の「切る」という意味と関連づけられ、「時間を分節する」という意味合いで用いられていたからであろう。

ただし、『ステノコレグラフィ』にはフレーズを閉じることや歩の調整のためではなく、伸び上がりの結果形成される姿態を見せることに重きを置くようなクペも確認できる。したがって、サン＝レオンのクペでは、「切る」という原義と動作が対応している場合と、原義から離れ動作の外形だけで定義される場合とが並存しており、動作と言葉の微妙な距離感が明らかになる。